

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

私の天邪鬼流リーダー観

東京支部長 遊佐 洋 (昭47年卒)



昨年、第53代目の洛友会東京支部長を仰せつかりました。

今から61年前の昭和28年、東京支部が、私の61年先輩に当たる故佐藤穂徳氏(明治44年卒)を初代支部長に擁して創立されて以来、帝大、新制の引き継ぎを含めて、世代継承をスムーズに行いながら着実に歩みを刻んできたその伝統を改めて感じております。

さて、私は昨年まで丸40年間、N T T (及びそのグループ企業)に勤務し、この間多くのプロジェクト

クトに直接携わってきました。当初はメンバーの一員として、そして歳を重ねるに及んでプロジェクトのリーダーとして。ほとんどは新たな事業化を目的とするプロジェクトです。そして多くの場合、その事業化の核となる技術、システムの開発も同じプロジェクトで併行して進めなければなりません。従ってプロジェクトの企画、実行から終了に至るまで、来る日も来る日も全く気の抜けない状況の連続でしたが、そのようなときでもリーダーとしてのあり方については、常に自問自答してきました。本稿でのリーダー観は、いわゆる会社経営者としてのそれではありませぬ。個別のプロジェクトを任され、それを企画、推進運営していく明確なミッションを担ったリーダー像です。

1. (識能) 『彼を知り己を知れば百戦殆うからず(孫子・謀攻)』の陥弊

いままら解説も要しない至言ですが、現代のマーケティング手法からすると、これには一つ重大な見落としがありそうです。それは顧客の存在です。

すなわち、(競争者: Competitor)、(自社: Company) のみならず、顧客 (Customer) を加えた、3C の分析を徹底してやるべき、というのが現代の教えです。

3C分析は、従って、現代のリーダーたるもの誰でも一所懸命やります。しかし、本人が納得行くまでどんなに完璧に(ある意味「悲観的」に) 準備しても、メンバー全員が神様でもない以上、実行段階で少なからず、想定外が生起する恐れがある、という当たり前のことをリーダーは、想定としておかねばなりません。そして、そのことを受容する心構えが必要です。

特に開発系のプロジェクトでは、進捗を妨げる見えざる罠が工程内のあちこちに潜んでおり、プロジェクトは、日々その「所在不明の敵」との戦いであることを痛感した次第です。

ところで、ここで余談ながら少々付け加えたいことがあります。

す。それは、3C分析など、現状の優劣状況やそのトレンドをベースとして、どんなに精緻で優れた解析を行ったとしても、抜本的な新規性はそこからはほとんど生み出せないということ。よって、現在のリーダー企業は多くは、自らの得意領域において新興企業のイノベーションに遅れを取り、いずれ衰退していくという主張です。

今日ではよく知られているこの逆説的経営観は、15年程前、米経営学者クリステンセンが「イノベーションのジレンマ」と呼んで喝破したものです。

ちなみに彼は、近年の日本企業の停滞を評し「良質な製品を改良する持続的な革新に留まっておらず、製品の差し替えにすぎない。成長をもたらしするために重要なのは、持続ではなく破壊的イノベーションだ(日経、平成26年1月1日)」と日本企業の問題点を別抉しています。閑話休題。

2. (心の幅) 『泰山は土壤を譲らず、故に大なり(史記・李斯伝)』でも最後はクールに

よく誤読されますが、この「譲らず」は「選ばず」の意です。リーダーは部下をえり好みせず、能力、性格面で色々なタイプを確保しておくに限りません。いざというときに応用の幅が広がるか

らです。もちろん、日頃から、自分には部下を信頼しているという態度を示しておくことが肝要です。

会報のメール通知サービス 登録受付中

「印刷された会報は要らない。パソコンで読む。環境保護に協力する。」という会員の皆様に、会報の発行をメールでお知らせするサービスを開始しました。

ご希望の方は、「会報メール通知希望」とお名前を洛友会 e-rakuyuu@kuei.kyoto-u.ac.jp までお送りください。

合わせて、技術広報誌 cue のメール通知サービスも受け付けております。

詳細は4月号(244号)にも記載されております。

旧陸軍の「統帥綱領(昭和3年3月)」には、「適材を適所に配置し、能力秀でざる者といえども、必ずこれに任所を得しめ、その全能力を發揮せしむ。みだりに部下の過誤を責めず、適時これに樹功の機会を与え、もってその澗刺たる意気を」とあります。

誠にもって耳が痛いですが、優秀なリーダーこそ肝に銘ずべき戒めだと思えます。

とはいえ、リーダーは最終的には人事に努めてクールに対処する

ことも求められます。

「プロジェクト成功の要諦は、メなメンバーを外すことだ」という至極もつともな言葉があることも、忘るべからず。

*** **

3. 〈勇氣、胆力〉『断じて行えば鬼神もこれを避く(史記・李斯伝)』は、「必勝の信念」の強要に非ず

決断実行の勇氣をもつてプロジェクトをスタートさせた後も、リーダーの断固たる不屈な意思が、事を成就するに当たつての恐らく絶対条件になるのではないのでしょうか？

困難に直面したとき、リーダーがふらつき部下に不安を与えるようでは危機は乗り切れません。かといって、綿密な作戦を伴わない「匹夫の勇」では全く頂けません。

〈1〉悲観的に準備し、〈2〉適材適所のメンバーを配置してプロジェクトを開始したら、〈3〉リーダーは時に「蛮勇」を振るうことも必要になります。

旧陸軍の「統帥参考(昭和7年7月)」には「将帥の真価は実に難局に際して発揮せらる。危急存亡の秋、部下は仰いでその将帥に注目す。沈着剛毅、樂觀を装いて部下の囑望をつなぎ、その士氣を作興」とあります。

どんなに悲観的に準備してもそれは飽くまで想定です。実際、プロジェクトが進行すれば、ままた想定外のことが起こります。

しかしここで、想定外だからといってうろたえ、責任転嫁に腐心するようではリーダー失格です。

危機管理上直ちに、真に信頼できる参謀格のメンバーと、最悪ケースを研究しなければなりません。その場合でも、対応方向、結論が出たら、あえて樂觀を装って対処する豪胆さがリーダーには要するということでしょう。

*** **

以上、私のプロジェクト運営の経験から培われたリーダーとしての自己流心得をまとめてみました。私自身あるいは周りのリーダーを観察すると、総じてリーダーたるもの、ここでいう三番目(勇氣、胆力)の発揮が最も難しいというのが偽らざるところです。

ところで、私自身が所管したプロジェクトの成功率は何%か? いや、これはまた別の機会にお譲りすることを海容ください。

教室だより

電気系修士学位授与式

平成26年3月24日(月)に大学

院学位授与式がみやこメッセで、引き続き修士学位授与式が桂キャンパスで執り行われました。74名の方々が晴れて修士(工学)となりました。

電気工学専攻41名

市原卓哉、伊藤俊平、井上智弘、梅田康希、越智貴章、梶山拓也、片山啓、川合博己、川原純、神田千秋、北尾憲一、櫛田将史、合田和弘、児玉貴大、後藤良介、米田宇志、柴田悠祐、清水康平、志村拓俊、下井智裕、滝井健太、中山洋平、檜崎諒介、縄田信哉、萩原明、原大智、萩行憲輔、久田祥史、深



江一志、星野大樹、星野光、松井研太、松村大気、松室亮之、武藤正人、村上拓郎、山口皓平、山口佳彦、金正勳、周艶、杉山肇

電子工学専攻33名

足立亘平、市川修平、出田喜和、伊藤史晃、乾善貴、井上卓也、浦出芳郎、沖野剛士、尾崎拓也、角元友樹、梶直樹、金子光頭、亀井裕太、鴻池遼太郎、権平皓、坂田彬、柴山健次、鈴木規央、高垣俊介、田中優也、辻中諒、中澤成哉、中村嘉浩、西川恭平、野村義樹、濱口拓也、宝玉晋、前田圭穂、初山知哉、山口瞬、山田昌樹、和田康佑、徐婷婷

卒業生送別会

3月25日、電気電子工学科の卒業生送別会(洛友会との共催)が開催された。みやこめっせにおける全学の卒業式に引き続き、電気総合館での卒業証書伝達式が行われ、卒業生一人一人に対して卒業証書が手渡された。

引き続き、総合研究8号館(旧工学部8号館)2階講義室2に参加し、洛友会荒木光彦幹事長からの饒の言葉とともに同窓会の活動や意義を説明いただき、乾杯のご発声の後、教職員を交えての歓談が行われた。

新入生歓迎茶話会

4月7日、電気電子工学科新入生歓迎茶話会(洛友会共催)が行われた。

入学式と学科ガイダンスを終えた、電気電子工学科の新入生(137名)が約20名の教職員とともに、会場である総合研究8号館1階講義室1に参集した。

荒木光彦幹事長は挨拶で、洛友会の成り立ち、最近の取り組み、学生会員の意義などについて説明された。

お茶やジュースでの乾杯が終わると、たちまち賑やかな声がかつ場に溢れ出した。出身地、志望動機、下宿やサークルなどの話題で盛り上がり、終盤にはあちこちでメールアドレスの交換が見られる



電気工学専攻長 萩原朋道

など、友人、仲間づくりの第一歩となったようである。

学科長 (日26年度)

引原隆士 記

2013年度研究室 对抗野球大会閉幕

24チーム(32研究室)が参加して昨年6月から行われてきた研究室对抗野球大会が3月28日をもって終了しました。4月7日に表彰式が行われ、優勝した山川研究室・大村研究室・篠原研究室合同チームの代表者に洛友会より寄贈された優勝カップが授与されました。なお、準優勝は野田研究室、3位は高橋研究室・守倉研究室合同チームでした。

高橋研究室 M2 田嶋翔太 記



優勝した山川研究室・大村研究室・篠原研究室合同チーム

本部だより

洛友会本部役員会報告

平成26年度役員会は、去る5月25日(日)正午より、長尾会長、3名の副会長、9支部長(代理を含む)、本部役員の合計20名の出席を得て開催されました。役員会は、長尾会長の開会挨拶の後、荒木幹

事長の司会で進められました。まず支部活動の状況と将来に向けた展望が各支部から紹介されました。支部の規模に応じて、会員向けのさまざまなイベントを開催し、会費納入率の向上にも取り組んでいます。また、京都大学全体の地域同窓会への協力も行っています。小規模な同窓会では、参加メンバーの固定化・高年齢化が悩みのひとつです。地方に転勤や移住した会員は是非参加してください。

平成26年度 懇話会開催のご案内

在校生(学生会員)と卒業生(正会員)の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。詳しいプログラムは、次回会報とホームページにてお知らせいたします。

記

日時:平成26年11月14日(金) 14時30分~19時30分

場所:吉田キャンパス電気総合館大講義室

懇親会:生協北部食堂2階

プログラム(予定)...

- 14時30分 開会挨拶 (電気電子工学科科長 引原隆士教授)
 - 14時40分 島崎眞昭先生(京大名誉教授・昭41年卒)
 - 15時30分 齊藤ゆみ氏(オムロン(株)技術・知財本部・昭63年卒)
 - 16時20分 休憩
 - 16時30分 加賀谷 卓氏(NTT東日本(株)東京事業部長常務取締役・昭54年卒)
 - 18時00分 懇親会(生協北部食堂2F)
- (会費:社費3,000円、学生無料)

連絡先:電気電子工学科事務室

電話:075-1753-15273

FAX:075-1753-15271

Eメール:konwakai@kuee.kyoto-u.ac.jp

(九大) システム情報科学、平22年博)

洛友会本部総会報告

平成26年度本部総会は6月30日(日)、ホテルグランビア京都において、関西支部総会に引き続き開催されました。会員81名の出席がありました。

長尾会長の開会挨拶の後、荒木幹事長の司会で、平成25年度の事業報告と決算、26年度の事業計画と予算、役員の変更が承認されました。先輩と学生の交流会への参加社が増加し、黒字となっているため一定額以上の剰余金を本部会計に繰り入れること、また洛友会報の郵送部数の見直しなどの経費削減策などにより、収支の改善が図られています。役員につきましては、長年顧問を務めていただいた、森本芳夫様が逝去されたので顧問は空席となります。また、学科長の交替に伴い、幹事が小野寺秀俊教授から引原隆士教授になります。

推薦会員

(平成26年5月25日承認)

- 白石誠司 教授 電子工学専攻 (京大 原子核、平15年博)
- 竹内繁樹 教授 電子工学専攻 (京大 理学、平12年博)
- 原田博司 教授 通信情報システム専攻 (阪大 工学、平7年博)
- 安藤裕一郎 助教 電子工学専攻

報告は、荒木幹事長からの洛友会本部報告と、引原幹事による電気系教室の現況紹介です。荒木幹事長からは、25年度から順調に運用されているWEB名簿システムや、耐震補強工事後の電気総合館や桂キャンパスの最近の状況や、

洛友会が後援しているエレクトロニクスサマーキャンプに参加している学生会員の活き活きとした様子などが紹介されました。最後に、逝去された深尾昌一郎名誉教授を偲ぶ会の案内がなされました。森本様、深尾様には謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

会員寄稿

鉄道会社のＩＴ屋のお仕事

藤垣 元裕

(昭61年卒・関西支部)

私は現在、鉄道会社（ＪＲ西日本・以下当社と記述します）のいわゆる情報システム部門にて、鉄道会社で使われる各種ＩＴシステムに関わる業務を行っています。といっても鉄道会社のＩＴシステムって一体どんなものがあるのか、また鉄道会社のＩＴ屋はどんな仕事をしているのかなど、あまり一般には知られていないと思



ますので、本紙面をお借りしてその一端を紹介いたします。なお、鉄道会社と一般化していますが、実際には当社だけの特有の事情も多々ある（むしろその方が多い）かもしれませんので、他の鉄道会社にお勤めの諸兄姉にはその点御容赦頂ければと思います。

まず、鉄道会社の利用するＩＴシステムの概要を紹介しますが、これは大きく分類すると二つに分けられます。一つは一般にどの企業でも使われている財務関係、人事関係、グループウェア等のバックオフィス関係などのシステムで、こちらは特に鉄道会社だからといって特別なことはあまりありません（細かく立ち入ると色々あるのですが省略します）。もう一つは鉄道事業を営むために直接利用するシステムで、これはさらに業務系統に応じて「営業系」「運輸系」「設備系」などと分類することができます。営業系システムの例としては、列車の座席予約および発券を行うシステム、ＩＣカード乗車券データを管理するシステムなどお客様に直接関わるものや、駅の売上を管理するシステム、旅客流動データを管理するシステムのような社内向けのものがあります。運輸系システムの例としては、列車ダイヤを管理するシステム、車両・乗務員運用作成を

支援するシステム、時刻表を作成するシステム、列車運行管理を行うシステムなど、鉄道運行業務の様々な場面で使われるシステムがあります。設備系システムの例としては、車両設備、軌道・構造物等設備、電気設備などの保守管理作業を支援するシステムや、安全に関わる各種データ管理のためのシステムなどがあります。いずれのシステムも鉄道事業を日々営むにあたって今日なくてはならないものになっています。

ところで、今こそ鉄道事業のあらゆる場面でＩＴシステムが使われるようになりましたが、私が入社した26年前には、ＩＴシステムといえば列車座席予約販売システムや新幹線の運行管理システムのほか、経理関係などのシステムがいくつかあっただけで、当時はあらゆる業務を紙と鉛筆で行っていたといっても過言ではない状態でした。今のようない勝手の良いパソコンもなかったのです。例えば駅では一日の営業が終わると乗車券の売上額を集計し、各券種ごとの在庫枚数や現金残高と突き合わせて過不足がないかどうかチェックし、電卓やソロバンを使ったタテヨコ計算を行って日報に書き起こすという、極めて面倒な作業を日々実施していました。また運輸・車両系の現場では、ダ

イヤ改正が行われたり臨時列車が設定されるたびに、法定検査切れを起こさないようチェックしながら車両を割り当て、労働基準法違反にならないようチェックしながら乗務員の勤務を組み、各種の書類に転記に転記を繰り返して、それを何人も目でチェックを重ねてようやく配布するという、人間の注力力の限界に挑むような作業が行われてきました。そのような状況で現在とあまり変わらない規模の列車本数を日々運行しお客様を運んでいたわけですから、これら「人間系システム」を開発した先人たちは別の意味で大いに敬服に値すると思います。が、やはりＩＴでできる仕事はＩＴに任せて人間にはもっと人間らしい仕事をしてもらうのが時代の流れです。で、当社でも各業務に段階的にＩＴシステムを導入していき、近年になってようやく基本的な業務を一通りカバーするようになったという状況です。

さて、私もこういう鉄道事業ＩＴ化の道筋を辿りながらＩＴ屋の経歴を重ねてきたわけですが、ここで鉄道会社におけるＩＴシステムの特徴について感じることを述べます（全く私の主観的な感想で、他の業種と比較したわけではないので異論があるかもしれません）。まず第一に、鉄道のＩＴは

夜も休日もない、という宿命があります。これはもちろん鉄道自身からで、必然的にＩＴシステムも24時間365日サービス提供することになるからです。もしトラブルが発生すると夜中であっても駆けつけ、復旧まで不眠不休で対応することは珍しくありません。また大規模システムになると一つのトラブルが何千人ものユーザーに直接影響しますので、一方で迅速な復旧を図りながら、もう一方で業務影響をどう回避または軽減するかについてユーザー部門と調整しながら対策を練ることになりません。私自身大きなトラブルを何度も経験しましたが、何千人ものユーザーが復旧を今か今かと待っているかと思うとプレッシャーは相当なものがあり、その状況で沈着冷静な対応が求められるのでなかなかの精神力が必要になります。

第二に、鉄道会社はユーザー部門の仕様へのこだわりがとて強いということがあります。具体的には、画面や帳票などユーザーインタフェースへの注文が細かく、またＩＴ屋から見るとシステム化せず

に運用で対応した方がよいと思うような例外的なケースまで含めてあらゆる処理をシステム化しようとする傾向があり、その結果シス

テムが極めて複雑になることが多いです(年に1回あるかないかというケースでも、もし発生して手作業で誤った取り扱いをすると困る、という理由でシステム化を求められます)。大勢の社員が日々使用するので、使いやすく入力間違いを起さないシステムにした

いことは理解できるのですが、反面IT屋から見るとバグを作りこみやすく保守性の悪いシステムになつてしまう(しかもそれは言い訳にできない)のが辛いところで

最後に宣伝になりますが、JR西日本を御利用される皆様にとても便利なインターネット上のサービスを紹介して、本稿を締めくくらせて頂きます。それは「JRおでかけネット」という、JR西日本の鉄道サービスに関する総合的な情報ポータルです。この中には列車ダイヤ・料金の検索、方面別割引きつぷの検索、遅れ情報の案内、新幹線や特急の座席予約(お安くなります!)などJR西日本に関する情報が一通り揃っているほか、沿線の観光スポット案内、イベント情報、梅・桜の開花情報、紅葉情報なども充実しています。「JRおでかけ」でググるとすぐ出てきますので、出張や行楽などおでかけの際にはぜひ御活用頂ければと思います。またその際には、

システムを日々運用保守しているIT屋の存在も少しは思い出して頂けると幸いです。

小京都とイタリア旅行

岡村 智明
(平23年修卒・中国支部)

今年の4月でいよいよ社会人4年目に突入致しました。巷では社会人として3年経てば一人前説や、最初の3年で仕事人生の大半が決まる説があるようですが、私の社会人になっての3年間は実に様々な経験を積ませていただいたと感じています。

1年目は備中の小京都と呼ばれる岡山県高梁市に配属になりました。旅行等で他県に出向く際に「○の小京都」という言葉をよく聞くなと思っていたのですが、少し調べてみると全国には50以上もの小京都があるようです。小京都を称する自治体が集まる団体「全国京都会議」によると、小京都の定義として、「京都のように日本の自然景観がある」「歴史的に京都とのつながりがある」「伝統的な産業や文化が育まれている」のうち、加盟する際には一つ以上該当することが条件となっているそうです。

小京都の中でも高梁市は、美しい山々に囲まれた盆地の中で清流

高梁川が流れ、現存12天守のひとつで国重要文化財の「備中松山城」や国重要伝統的建造物保存地区の吹屋、国重要無形民俗文化財の「備中神楽」や、江戸時代から伝えられている「備中たかはし松山踊り」

「成羽愛宕大花火」があり、長い歴史と豊かな伝統文化を受け継ぐ町です。高梁市では、Macを手元にPhoneのアプリを作っていた大学院時代の生活から一転して、のこざりとナタを手にとり電線路に倒れかかっている木々を切り倒すという木こり屋生活を送らせていただきました。熊よけの鈴を身につけ道なき山々を歩き回り、「木登り名人」という道具で木々に登り、時には猪やサルに遭遇したりとたくましく成長致しました。

昨年からは岡山県倉敷市に転勤になりました。ここでも小京都と呼ばれる倉敷美観地区が近くにあり、なかには京都には縁があるのかと感じています。倉敷川に沿って白壁の町並みが続く倉敷美観地区は、江戸時代に天領として繁栄し、柳並木の堀割には常夜灯や黒いポストなど、往時をしのばせる品々が残され、国の伝統的建造物群保存地区に選定されています。夜にはほのかな灯りで浮かび上がる幻想的な美しい町家や蔵の白壁は一見の価値があるかと思

はぜひご覧になって下さい。

そんな私もなにかの縁で昨年結婚することになり、今年の4月にイタリアへ新婚旅行に1週間行つて参りました。ローマから始まりナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノとイタリアを一周してきました。中でも印象に残っているのはカプリ島の青の洞窟です。必ずしも洞窟内に入れる訳ではないと聞いていたので、青の洞窟を旅行プランに入れるかどうか悩んでいましたが、結局申し込むことにしました。カプリ島につく前は

若干雨が降っており、これはもう無理かなと思っていたのですが、なんと私達が島に着く10分前から青の洞窟に入れるようになったとのこと。洞窟の前で船酔いと格闘しながら待つ事1時間程度、ようやく青の洞窟内に入ることができました。この洞窟には、洞窟のある入り江から手漕ぎの小船に乗って入って行くことができます。入り口はとても狭く、半ば水中に埋もれています。船頭さんが入り口に張られた鎖を引いて小船を洞窟内へと進めるのですが、その際に乗客も頭と体を船底に沈めることが必要となるくらい狭かったです。初めてこの場所を見つけた人は何を思つてこの狭い洞窟に入ろうとしたのでしょうか。中に入れば、一面マリンプルーの世界。

海底から青いライトで照らしているのかと思うほどに眩く輝く青い海が待っています。奥行き約60メートルの洞窟をぐるりと小船が一周するのですが、時間は非常に短く、あつという間に終わってしまいました。シャッターチャンスは、一番奥に入つてから洞窟の入り口に向けて撮影するのが良いと思うので行かれた際にはぜひお忘れのないように。

イタリア旅行中驚きだったのは、トレビの泉に訪れた時でした。私はあまりトレビの泉について詳しくなく、コインを噴水の中に投げると願いが叶うという程度しか知らなかったのですが、どうやら枚数によって意味合いが異なるそうです。コイン1枚を投げると、ローマに再び来ることができ、そして、好きな人と結婚したい人は2枚のコイン、離婚したい人は3枚のコインを投げるそうです。イタリアにはツアーで行ったのですが、ツアーのメンバーは私たちと同じ新婚さんがほとんどでした。トレビの泉行きのバスの車内では他の新婚さんたちのコインを何枚投げる?などといったコイントークが繰り広げられていたのですが、いざトレビの泉に到着してみると、たまたま泉の掃除の日だったようで泉の水が抜かれ、か

ながら楽しみにしていたツアー客の目の前に広がるのは、観光客が願いを込めてコインを投げ込んでいたおじさん達が掃除をしながらコインを拾っている姿でした。泉の本来の姿を見る事ができず残念だったので、これはこれで貴重な体験ができたなと思っています。



写真はからっぽのトレビの泉を掃除するおじさん達

今後も様々な縁を大事にしながら、会社生活やプライベートを充実させていけたらなと思っています。

富山の宣伝

杉本 和也

(平23年院卒・北陸支部)

大学を卒業し、故郷富山の電力会社にUターン就職をしては3年が経過しました。この間、時間がゆっくり流れるのんびりとした田舎暮らしを満喫してきたわけですが、そんな田舎の富山に大変革

をもたらすかもしれない一大イベントが近づいています。2015年3月北陸新幹線開業です。北陸人以外にとっては「あーそうなんだ」程度のニュースかもしれませんが、ここ富山ではメディアで新幹線関連のニュースを見ない日はないほどの一大関心事です。初めて富山県に試験車両のイーストアイが来たときはまるで開業したかのような盛り上がりぶり、来年の開業日は一体どんな騒ぎになるのか想像もつきません。1972年の基本計画決定から43年。県民の悲願がすぐそこまでできています。

日増しに盛り上がる県内ですが、新幹線の開業はいいことばかりではありません。並行在来線との分離やストロー現象など、解決すべき課題も多くあります。観光で来た人がまた来たいと思えるように、そしてその中から住んでもいいと思う人が出てきてくれるように、富山の魅力をアピールしていく必要があります。そこで、この場を借りてその魅力をいくつか紹介したいと思います。

最初に、富山を語る上で欠かせないのは立山です。今は登山や観光といったレジャーの場となっている立山ですが、古くはそこに地獄と浄土があると人々が信じる信仰の山でした。火山性ガスを絶え



ず噴出する地獄谷と咲き誇る高山植物の光景は確かに、現世と異なる他世界の存在を感じさせます。その他にも立山にはラムサール条約に登録された弥陀ヶ原や落差日本一の称名滝など、多様な自然環境が存在しています。そんな大自然を体感するためには、まず室堂という2450mの地点までバスやケーブルカーで行くこととなります。

この道中で春から初夏にかけて開催される立山雪の大谷というイベントは、間近に迫る10m以上の雪の壁を体感できる日本でも数少ない必見のイベントです。室堂周辺には先ほどの地獄と浄土の世界が広がりそこだけでも十分楽しめますが、さらに長野県側へロープウェーなどを乗り継げば、かの有名な黒部ダムにたどり着きます。今年の観光放水は6月26日から10月15日までということ、その期間中は約10m/sの強大力の放水を楽しめます。ところで黒部ダムは関西電力さんのダムですが、富山の電力会社は黒部ダムの山を一つ挟んだところに有峰ダム

という黒部に勝るとも劣らぬ巨大なダムを有している、この機会に覚えて頂けたら幸いです。ちなみに有峰ダムはマイカーでも行けます。

立山の魅力は直接訪れて感じる大自然もありますが、外から見る姿も大変お勧めです。富山平野から見える立山は空に描かれた絵画のように美しく、中でも富山湾の西側の高岡市雨晴海岸から見える立山連峰は、海越しに3000m級の山々を望むという世界的にも珍しい光景で富山を代表する景色になっています。よく写真でも紹介されるのですが、生で見るとその雄大さは一味も二味も違うので、是非一度実際に足を運んで体感してみてください。ベストシーズンには空気が澄んで晴れの日が多くなる3、4月です。

立山の豊かな自然を体感した後はおいしい食べ物で一杯やるのが定石ですが、富山の食べ物といえは海産物は外せません。有名どころで言えば春のホタルイカと白えび、そして冬の寒ブリは今や全国的なブランドです。これらだけでなく、天然の生け簀と言われる富山湾では数多くの魚介が獲れるので、必ずや気に入る1匹が見つかるはず。その中でも個人的にはふくらぎと新湊のカニがお勧めです。ふくらぎはブリの子供のこ

とで、成体のブリよりも脂が少ないので食べやすく、値段もリーズナブルで地元ではブリよりもふくらぎです(というよりブランドとなったブリは高級魚で庶民は手が出ない)。朝獲れのふくらぎは身がよく締まって絶品です。新湊のカニはブリ同様冬のもですが、このカニで出汁をとった鍋を一度食べると普通の店で鍋を食べられなくなり。カニだからといって決して高級なわけではなく、地元のスーパーでは規格外のものを一杯500円ほどから買えるのでとてもリーズナブルで、贈答用などでない限りスーパーでお土産のカニを調達するのもいいと思います。この物流や保存技術が発達した時代に、都会ではお金を出せば日本中の美味しいものを食べられると思いますが、富山にいれば美味しいものを安く日常的に食べられる、それが大きな魅力だと思っています。

その他にも魚津の蜃気楼や宇奈月のトロッコ電車、世界遺産の五箇山合掌造りといった多くの見所と、立山酒造を代表とした地酒もたくさんあります。確かに富山は田舎で、観光地となるような大きなテーマパークもモダンな建物も有名な夜景もありませんが、四季を通じて全く異なる姿を見せてくれる自然や旬の食べ物がありま

す。北陸新幹線ができれば最速で東京から2時間7分。関東のみならず、来年は富山に来て東北とも信越ともまた違う日本を是非とも感じて下さい。

一方、京都市大がある関西方面の方は新幹線開業によって若干行き方が変更になります。今現在関西と富山を結んでいる特急サンダーバードが全列車金沢止まりとなつてしまい、富山へは新幹線に乗り継ぐ必要がでてきます。しかしご安心下さい。北陸新幹線では金沢富山間を結ぶ新幹線シャトル便「つるぎ」が導入予定で、これにより金沢でスムーズに乗り継ぎができ、新幹線の時間短縮効果も合わせるとこれまでと大差ない時間で富山までくることが出来るでしょう。所要時間が変わらず話題の新幹線も楽しめるとなると、富山まで来ない手はありません。みなさんのお越しをお待ちしております。

海外でのコンサルティング業務の留意点 — 陥りやすい盲点と その対策 —

橋本 道哉

(昭33年卒)

・要旨

多数の日本の技術者が開発途上国に技術協力に出かけ、プロジェ



クトの調査を行って報告書や提案書の作成等のコンサルティング業務を行っているが、これらの日本技術者が行ったコンサルティングの成果が採用されてプロジェクトとして実現した例は非常に少ない。調査報告書の内容が不備で非現実的あることに起因するものが多い。

実際に海外に技術協力に出かけるときには大多数の人は、自分の技術力と語学力を心配するが、現地で遭遇するトラブルは別のことが原因になっている場合が多い。海外技術協力業務を実施する際の留意点について私見を紹介し始める。

私は日本国有鉄道に在職中、昭和45年フランス政府給費留学生としてフランス国鉄へ7ヶ月間留学をしました。それがきっかけで昭和51年のイラン国の新幹線建設の調査プロジェクトを手始めに、

色々な国の鉄道プロジェクトに関与してきました。業務内容もプロジェクト・ファイナンシングから

マスタープランの作成、フィージビリティ・スタディ、入札管理および施工管理までのプロジェクトおよび研修会の講師等の技術転移、さらに業務の対象もJICA案件(日本政府)、円借案件(国際協力銀行)、民間および相手国鉄道との直接契約等のコンサルティング業務に10数年間従事してきました。

私が直接経験したことおよび身近に起こった事例をもとにして日本人が陥りやすい盲点と反省点を紹介します。

今後海外でプロジェクトに従事される方々に少しでも参考になれば幸いです。

1. 派遣する側の留意点

海外業務と日本での業務の根本的な相違は、日本では組織で仕事をしますが、海外では個人が一人の能力で仕事をしなければならぬということ。したがって派遣技術者の人選に当たっては業務の内容をよく検討し、最適な技術者を派遣しなければなりません。組織の中で人事上の処遇に困った人を派遣するケースが時々見受けられますし、また契約書に記載されている業務内容をよくチェックもしないで派遣するケースも見受けられますが、そのような場合、まず成功はおぼつかない

でしょう。そうになると、現地へ派遣される人は大きな迷惑を被るし、派遣する側も自分の組織のみならず日本国のイメージダウンを引き起こします。また、たとえ有能な技術者を選んでは送り出したとしても、これで幹部の仕事が終わったと思つたらそれは大きな間違いです。日本国内に派遣技術者の支援体制を作り、絶えず現地とのパイプを太くして公私ともにバックアップしてあげなければなりません。それでも問題が起れば直ちに現地に飛んで行って、大きなトラブルにならないよう対応しなければなりません。組織内での失敗はその部門内、せいぜいその組織内で処理できるものが多いが、外国での失敗は日本国だけの問題だけでなく国際的な外交上の問題にもなりかねません。

この種の問題は病氣と全く同じで早期治療が最も重要で、手遅れになると取り返しがつかない大きな被害が発生します。私自身も、本国の幹部が現地に来て対応しないために取り返しのつかない大きなトラブルが発生したケースを目撃しており、派遣企業は莫大な経済的な損失だけでなく信用まで失いました。海外コンサルティング業務の成否は国内のパックアップ体制にあると言っても過言でないと思います。幹部がパーティーや

開業のセレモニーには喜んで出かけるが、現地トラブルが発生してクライアントから呼び出しを受けても現地へ行くのを渋るようでは、いくら現地で専門家が頑張っても成功はおぼつかないでしょう。

海外でのプロジェクトは有利な契約を結んだと思つても簡単には利益が出ません。その主な理由は、現に国内の業務に従事して実績を挙げている有能な人間を派遣しなければならぬこと、クライアントに提出した成果物の承認をもらうまでの待ち時間や翻訳・製本にかかる時間、それらの待ち時間に他の業務を行うことが殆んど不可能であること、スタッフ不足や環境不備による業務の能率低下、予定どおり入金されないこと、さらには現地での税金対策の不馴れ等々です。それ故、初めから利益をあげるのは非常に困難です。

海外業務にはステップによっていろいろな業務があります。しかし、ステップによりパターン化されたものが多いので、各個人が一旦習得したノウハウや作成した成果物を整理して組織の財産としておけば、次回の類似のプロジェクトを別の人に従事してもらったときに非常に役立つ。労力と時間の節約ができます。同種のプロジェクトの報告書を少し修正するだけで

ほとんど再利用が可能です。現地
でクライアントに提出した書類等
は、日本でも整理分類して保管し
ておき、ノウハウを得た人を大切
にし、いかに活用するかがコンサ
ルティング業務を成功させるため
のキーポイントでしょう。

2. 派遣される技術者の留意点

(1) 業務引き受ける前に

派遣を引き受ける前に最も重要
なことは、自分が何をしなければ
ならないか、それを遂行する能力
が自分にあるのかどうかを見極め
ることです。当然、自分に課せら
れた業務の範囲、深度およびチー
ムメイトとの業務の関連もチェッ
クする必要があります。クライア
ントと取り交わした契約書を熟読
するのはもちろんのこと、自分に

課せられた業務の内容および範囲
を明記した文書をもった方がよ
いでしょう。出発前に聞いた話と
現地に到着してから要請された業
務内容とが大幅に異なることがし
ばしば起きます。その時には、そ
の文書を提示して自分の裁量で、
行うべき業務と余力がある場合に
サービスを決断することができま
す。少なくとも、自分ができない
ことを押し付けられることはない
でしょう。

英語ができなくてもよいとか、
在来の技術を持っていればよいと

いう条件で派遣された人が、英語
を話すことができなくて、先端技
術を知らなかったために無能者の
烙印を押され追い返されたケース
があります。これに関し私の経験
を紹介します。かつて私が海外の
研修会の講師を依頼されたときの
ことです。出発前に聞いた話では、
教科書は依頼者側で作成し、私は
その教科書を使って英語で講義
し、通訳が英語から現地語へ翻訳
するという条件で現地に出かけま
したが、出発前の話とは非常に異
なり、私が教科書を作り、直接英
語で講義することになったので講
義量は倍増となり、さらに教科書
の作成業務が加わったので大変忙
しい経験をしました。

またある国の鉄道の脱線事故の
防止対策を作成するために派遣さ
れたとき、出発前には、レポート
には事故防止対策の骨子だけをA4
に2、3枚にまとめクライアント
に提出すればよいとのことでした
が、実際には40頁にも及ぶ英文の
円借款申請書を作成させられたこ
ともあります。

もう一つ例をあげると、以前私
が設計会社に勤務していた時に、
ある国の私の専門外の高度なプロ
ジェクトの入札仕様書の作成、入
札管理および施工管理を行う案件
があり、英語ができるという理由
だけで私に派遣の要請があり、上

司から何回も説得を受けましたが
お断りしました。この仕事を引き
受けていれば私自身の技術者とし
ての政治生命が終わるだけにな
く、当時所属していた組織にも莫
大な損失と信用の失墜を引き起こ
したのであると思います。この命
令を断ったために生じた当面の小
さな迷惑が将来の大きな迷惑を
救ったと思っています。事実、そ
の部門の有能な専門家を外部から
連れてきて派遣されましたが、業
務内容が高度なのでうまくいかず
契約期間の3倍以上の日数がかか
り、莫大な損失を被りました。ま
た、クライアントに対してもプロ
ジェクトが大幅に遅れ、大変大き
な迷惑をかけました。

(2) 業務を進めるに当たって

仕事を進めるに当たっての留意
事項として、まず守らねばならな
いことは、会議が終わってから必
ず議事録を作成し、双方で確認し
てサインをして一通ずつ保管する
ことです。日本人同志で打ち合わ
せした場合でもしばしば双方で誤
解が生じるのに、ましてや外国人
と外国語で会議をすれば、合意し
た結論に対して理解に差が出るの
が当然です。もし確認を怠って仕
事を進め、合意事項の相互の誤解
が原因で折角作成した成果に対し
て手直しを要求されても、証拠が
ないので泣き寝入りとなり、時間

と労力の損失となります。最悪の
場合、時間切れで期間内に業務の
完了が不可能となり大きなトラブ
ルになります。クライアントとの
打ち合わせはなるべく多く持ち、
その都度議事を確認して仕事を進
めてゆくと、仕事の進捗の支障に
なるように思えますが、トラブル
が防げ、結果的に良い成果物を早
く完成することができません。数ヶ
月間もクライアントと打合せもせ
ずに成果物を作り、いきなりクラ
イアントに突き付け、全部手直し
をさせられたという信じられない
ような事例を見たことがあります
です。そのうえ、提出した成果物に
対して承認の催促状を送ったの
で、一層クライアントの心証を損
ないました。日頃クライアントと
会議をせず、基本的な方針すら決
めないで、いきなり部厚いレポー
トを提出しても、クライアントは
日常業務で忙しいので読んでもら
えないし、また読んでくれても理
解してもらえません。結局全く異
なった方針で初めからやり直すこ
とになったので、数カ月にも及ぶ時
間と労力の損失を被りました。

次に、技術力のある人によく見
られる弊害について若干紹介しま
す。自分に与えられた任務の範囲
で必要にして十分な業務を行うべ
きです。後続の派遣予定がある場
合、あとから来る人の業務に支障

を来たしますし、プロジェクトの
進捗に悪影響を及ぼします。組織
の中で、たとえその人一人で開発
した技術でも、組織から資金面や
その他でバックアップを受けて開
発できたのに、自分一人で開発し
たと言つて一人でいい顔をするよ
うな人は、相手側からのみならず
日本人からも歓迎されません。最
悪の場合、組織の貴重な財産であ
るノウハウの流失になります。こ
ういう人は往々にして技術力は
あってもチームワークを乱しがち
です。

また次のようなケースもありま
した。ある詳細設計の経験が豊富
で有能な技術者が入札仕様書用の
設計をするよう依頼されました
が、工事施工のための詳細設計を
行いました。入札仕様の設計は施
工能力があるコントラクターなら
誰でも入札に参加できるようにす
ることを基本としますが、内容が
あまりにも粗いと応札業者の入札
書の内容に大きな差異が生じて評
価ができなくなるし、詳しくする
と特定の業者しか応札できなくな
るので、両者の兼ね合いで内容の
程度が決まります。日本人がもし
詳しくすぎる設計をすると日本の業
者しか応札できなくなり、コンサ
ルタントが自国の業者とつるんで
いると誤解されかねません。一方、
工事施工のための実施設計は、落

札した工業者が自社しかできない施工法やノウハウを取り入れ、最も経済的、かつ効率的な方法で最も良いものを作る工事の方法を詳細に決めるものであることか、当然内容は詳しくありません。したがって、それは他社には最適とはかぎらず、場合によっては施工が不可能になります。このケースにおいては、クライアントからあらぬ誤解を受けたばかりでなく、莫大な人手をかけて作成した成果物が無駄になって、初めからやり直すことになり、派遣元に大きな損失を被らせました。

次に最も危険なケースを紹介します。相手国のカウンタパートから要求が多いので、腹を立ててテーブルを叩きながら「これは契約外だ」と怒鳴り返した専門家がいました。これは全く言語道断な不祥事です。カウンタパートは契約書の内容を覚えているはずもないし、通常、日本人の専門家には相手国の技術者の100倍に及ぶ多額の報酬が支払われているので、熱心なカウンタパートほど多くの質問や要求をするのは当然です。日本で業者が施主に対してそんな失礼なことをすれば大変なことになります。自分の知っている技術を教えることによって優越感に浸り、自分の置かれた立場を全く理解していないからこんな不祥

事を起こすのでしょうか。こういう人間性に問題がある技術者は例えば技術力があっても派遣すべきではないと思います。

最後に業務の進め方ですが、調査の初期の段階では、国情や慣習、相手の鉄道の事情が分からないので軽率に自分の意見を言わず、まずクライアント側から情報や意見を聞くにとどめ、クライアントが何をわれわれに求めているか、真意を探り出さねばなりません。

本当の意味での技術の協力を求めている場合もありますが、自分達が作った計画や採用したいシステムや設備を上部機関に承認を得るための裏付けを求めている場合もあります。また、日本からお金を借りるために日本人のコンサルトからお墨付きだけを求めている場合もあります。したがって、クライアント側の事情を知らないで意見を述べると、ビンボケな協力になるのみならず、自分の意見の押し付け、さらに悪くすると日本の業者の売り込みの手先と誤解されかねません。したがって、初めのうちには技術者の教えたい気持ちを抑え、相手の現在の設備や考え方を褒めながらうまく質問し、本音を聞き出すのがよいと思います。いくら技術力があってもタイミン

(3) 英文レポートを作成するにあたって
最後に現地でレポートを作成する場合の最も効率的だと思われる方法を説明します。現地で短期間のうちに数10頁の英文レポートを書ける人は非常に少ないと思います。さらに開発途上国では印刷や製本もままならず、時間がかかります。したがって、通常の調査プロジェクトでは、現地調査を終了してから日本に持ち帰って日本語で原文を作り英語の専門家に翻訳してもらい、製本して現地に送るか、または持参して説明を行います。このやり方だと時間がかかりすぎて、タイミングを失う場合もあります。約20年前にバキスタンの3週間出張した際、レポートの作成期間が3日間しか与えられないのに、約40頁の英文レポートの作成と20冊の製本を行うことになりました。そのプロジェクトの内容は、ある駅構内で急行列車が停車中の貨物列車に追突して300数10人の死者が発生したので、このような列車衝突の防止対策を作ると同時に日本への円借款申請書を作成することでした。出発前に類似のプロジェクトの報告書を参考にして報告書の骨子を作り、日本でできるものは全部英語でパソコンに書き込んで現地に持参しました。報告書の構成として

は、
ア. 相手国の国情
イ. 相手国の鉄道の現況
ウ. 推奨する鉄道の近代化計画
エ. 推奨する列車衝突防止対策
オ. 当該プロジェクトの評価
とし、イ. 項からウ. 項までは日本ですべての調査報告書や日本国内で手に入る資料を検討してほとんど作り上げ、現地で現状を確認して訂正する方法をとりました。持ち込んだパソコンでその都度、夜ホテルに帰ってから追加や訂正をしました。このテーマの核になるエ. 項については、まず相手国のカウンタパートから考えを聞き出し、カウンタパートの考えを最大限に尊重して共同で列車衝突防止のシステムを作り上げました。そしてカウンタパートにそのシステムの詳細の記述とプロジェクトコストの算出をしてもらい、われわれは設計の基本的な考え方とプロジェクトによる効果を計算することで作業の分担をしました。で、時間と労力の節約ができました。さらに、われわれ日本人にとって最も苦痛な英語での運輸大臣へのプレゼンテーションの際に、われわれの英語の説明がまったとさきや複雑な説明をしたときにはバックアップをしてくれました。質問に対しても代わって答えてくれたこともあり、予期しなかった

効果がありました。
レポートの作成に際しては、まず目次を提示して承認を得て、次にカウンタパートが作成した原案を基に検討して列車衝突防止対策を作成し、合意を取り付けました。手戻り作業もなく早くレポートができたおかげで、われわれが帰国後約1週間で円借款申請書が現地の日本大使館へ持ち込まれました。
3. おわりに
現在、日本政府は発電所やダム、高速道路、水道施設、高速鉄道、都市鉄道等の社会インフラを建設するプロジェクトの輸出を推進しています。これらのプロジェクトは色々な幅広い技術分野で構成される総合技術です。
特に鉄道建設プロジェクトは、運転、車両、土木構造物、電気設備、情報通信システム、メンテナンス等のハードの技術に加えて、需要予測、財務分析(採算性)や経済分析(B/C等)が加わります。
最近では、日本国内には鉄道建設のプロジェクトが殆んど存在しないので各々の分野においても建設技術者が不足しています。さらにこれらの幅広い分野のプロジェクトを総合的に管理する、いわゆるプロジェクト・マネジメントができる技術者が殆んど居ません。プロジェクトの成否を左右する

プロジェクトマネージャの早急な人材育成が望まれます。

さらにプロジェクト管理技術者だけでなく、経営者もNSPEの倫理規定等を読んで技術者倫理を勉強する必要があります。もし彼らが技術者としての倫理観を持っているれば、現在報道機関で騒がれているような外国鉄道建設に関わる贈賄事件も防げたと思います。

日本の競争力回復

岩 曾 弘 三

(昭28年卒)



国民の豊かさの指標として、ごとの物価の違いを考慮しての、国民1人当たりの購買力平価換算GDPが使われる。2012年のデータによれば、アジアでは、シンガポール(3位)、香港(7位)、台湾(18位)、日本(22位)、韓国(26位)となっている。

また、国際競争力については、「90年代世界トップレベルの技術大国であった日本の国際競争力は、いまや非常な低落」と書かれ

ている。スイスの国際経営開発研究所(IMD)が毎年発表している資料によれば、2013年では日本は24位であり、香港(3位)、シンガポール(5位)、台湾(11位)、マレーシア(15位)、中国(21位)、韓国(22位)に先んじられている。

一方、2004年に中国の上海交通大学が膨大なマンパワーを掛けて、各種のデータを集めて世界のトップ500大学ランキングを発表して以来、米英の種々の機関が毎年似たデータを発表している。この2004年の時はアジアからは東大14位、京大21位で、100位以内に阪大、東北大、名大が入っていた。その後は年を追うごとに日本の大学の順位が低下している。

評価機関は別ではあるが、英国The Times紙(2013-2014)ランキングではすっかり様相が変わっている。400大学まで発表されているが、100位以内は次の通りである。東大(23位)、シンガポール国立大学(26位)、香港大学(43位)、ソウル国立大学(44位)、北京大学(45位)、精華大学(北京)(50位)、京大(52位)、Korea Advanced Institute of Science and Technology(56位)、香港科学技術大学(57位)、Pohang科学技術大学(韓国)(60位)、南洋理工大学(シンガポール)

(76位)となっている。日本として次に出てくるのは125位の東京工大である。阪大(144位)と東北大(150位)は国立台湾大学(142位)の後となっている。その他の日本の大学は200位以下である。昔は交通事情から遠くの大学へ進学するのが大変であったので、7箇所旧帝大は、それぞれ高い評価を得ていた。京都から東京へ行くのみでも10時間以上を要した時代と大きく変わった。

このような現実の前にして、アベノミクスは自国通貨の国際価値を低下させることを前提としていて、多くの途上国では自国通貨のインフレによる価値低下を一生懸命にならしているのと相反する行為と見える。私は日本の発展には、日本の社会構造の見直しが必要と考える。以下に私の経験をベースに述べますが、最も心配するのは自慢話と不愉快に思われることです。昔のどこかの平凡な人間とその当時の社会は、今とは違っていた経験例を現代社会の改革の参考として役に立てばと考えて書いたと受け取って頂きたいと思います。

私は旧制最後の卒業生ですが大学院を経て昭和30年に就職することとなった。AERAの年末号で「京大も方針転換で従来は無関心であった就職試験へのガイドを実

施」のような記事がでていました。昔は卒業生を採用したい企業は就職担当の教授に希望を伝えて、教授は適当と思われる学生を呼んで希望を聞いておられたようです。私も「電電公社は規模も大きくて、やり甲斐がある」と言われて、その仕事も分らないままに「宜しく願います」と回答した。東京で多数の応募者に筆記試験と面接があったが、裏では決まっていたのでしよう。就職後に多くの人から「電電公社とは何をする所ですか？」と頻りに聞かれたほど世の中に知られていなかった。

日本は「護送船団方式」と言われることが多くて、社会の諸活動が、落ちこぼれを防止するために、その時の一番遅い船に合わされることとなるが、当時のNITTの社員数17万人に対して、技術系の採用数は32名であったので同期生のレベルは合っていた。

ここでは当時のような少数選別方式が現在の多数採用・平等処遇とは違って、企業の優れたリーダーを生み出し易いことを説明したい。少数であるので短期間で多くの仕事の経験をさせて、急速に昇進させることができる。社内では特急券組と言われていた。技術の総元締めである技師長室の電話交換、無線、伝送、線路などの多様な係りに分散配属になった。当

時の会議資料は謄写版印刷のために、しばしば、幹部会議資料のガリ版切りと印刷をさせられたので、その一部を秘かに余計に印刷して、入社早々にもかかわらず社の最高秘密に接することができた。

関東大震災後の復旧に、米国とドイツから電話自動交換機を導入し、戦後もそのままのシステムが使用されていたので、新規に米国とドイツから一方式ずつ輸入して使用することとなり、入社3年目に過ぎないのに、ドイツの最新方式が導入される西宮電話局に配属された。

ドイツ人技師と共に働いたこの仕事が終われば、本社に戻り、京都で試験が行なわれることになる市外通話発信用の共通制御式電話交換機の開発に従事した。月、水、金の夕方に本社で仏語の講習を受けた後、夜行列車に座って京都へ通い続けた。入社7年目には、群馬県内の電気通信を計画する責任者となり、1年余り過ぎて、上司に「もう十分勉強ができました」と話したところ、本社の電話料金制度と料金計算機開発部門に配属された。

入社10年目には、今のJTICAの前身であるOTCAの専門家として、仏語しか通用しないカンボジアへ派遣されて、その後駐米

大使となる技術局長と毎日のように広範な話をしながら仏語の指導書類も書いた。

2年の勤務が終われば、本社で国内の主要な市外電話局の設備を整える役を2年務め、次いで総合設計調整という仕事に就き、建造物を含めて電電公社の全国の主要な設備の新設を審議する役に就いた。遣り甲斐のある仕事のために、年間50回余りほぼ徹夜の勤務を行った。昭和44年に十勝沖地震が発生し、本州と北海道間の通信が途絶したので、予算の制約無しに、徹底的な災害対策をすることとなった。東京の市外電話局は、東京以西と以北の市外通話の中継をしていたので、故障すれば市外通話が広域で不通となる可能性があり、大阪も同様であった。そのために、大阪の市外局機能を京都に分散しようとしたが、過去の地震の記録を調べると、京都が地震災害を受けた頻度が高いのと距離が近すぎることが判明し、100km圏の姫路へ分散することとした。東京も分散先に前橋を選んだ。その他に通信用伝送路の2重化、迂回路の設定、非常用蓄電池の固定など考えられる限りの対策を決定した。

ここで決定した中で誰にも話してこなかったが、今でも秘かに誇りにしていることがある。全国の主要な市外電話局は万一火災など

があると、その都市と外部地域との市外通話が途絶するので、市外電話機能を2重化する方法を決めた。京都は烏丸三条の市外電話局とは別の場所と同じ機能を持った第2の市外局を作ることになり、事務局は東寺の近くに高層ビルを建築する案を用意した。私は当時としてはあまり言われなかった「景観を損なう」と反対して、遙か南方に建てさせた。今も度々テレビなどで、東寺の五重の塔が、近くに高い建物もなく聳え立っているのを見る度に「昔に強く反対しておいて良かった」と内心喜んでいる。(広島島の原爆ドームの後ろに巨大なビルが建てられたのは残念)

その後、通信研究所で4年間、高級なコンピュータに類似の電子交換機の開発に従事し、その次の1年間は経験を生かして、パキスタンに電気通信研究所を日本から寄贈するJICAプロジェクトに参加し、昭和50年から3年間はロンドン事務所長を務めた。研究所の経験があったので、英国郵電公社の研究所を訪問する時にも、全く劣等感を持たなくて済んだ。

昭和56年には52歳でN T Tを退職させられて大手通信メーカーに移籍し、58年からはマレーシアのマハティール首相の要請で当初1年の予定でコンサルタントを務めたが、通信の民営化前のために、延長続きで4年間勤務し、要請に応じて、年金制度、放送の倫理規定など約90種のA4で約1,000ページの報告書を提出した。長年に亘り広い経験を持っていたので、この前後にフィリッピン、インドネシア、ラオスの電気通信長期計画作成のリーダーを務めることができた。また、マレーシアからの帰国後は、春秋の2回、内容は電気通信運営体として必要な諸知識を教える2週間の途上国向けの幹部セミナー(副総裁、局長クラス)を毎回20ヶ国からの参加者を対象に実施した。その研修を受けた人から、自国で多くの幹部向けに同様なセミナーを実施して欲しいとの希望がでてきた。それに応じたことを含めて、中国、ロシア、イラン、多くのアフリカ諸国など25カ国向けにセミナーを企画し、単独で出かけたこともあるなど、仕事のみで50ヶ国以上を訪問できた。

最後段階では、年齢制限でその子会社に移籍した。その会社は技術系70名ほどを採用し、採用後に実施した社内研修の終了試験では95点から10点まで分布していた。給与・仕事など平等のために優秀な者は辞めて行った。その後、5年間、69歳まで日本I T U協会に勤務したが、国連専門機関であるI T U(国際電気通信連合)の本部はジュネーブにあり、極めて下手ながらも仏語と英語の経験を生かすことができた。

私はエリートは1-2年ごとにポストが変わる役所の雰囲気が残る電電公社に勤務したので、非常に多くの経験ができた。しかし、次に勤務した通信メーカーでは大きな問題点を見つけた。事業部制のために、事業部長は自分の専門分野の知識は豊富に持っているが、役員に昇格すると管轄が拡大して、それまで関係してこなかった分野の決定をしなければならなくなる。たまたま電話交換機部門も統括する専務取締役になった人は、交換機に関する経験がなく、交換機における保守・運用機能の重要性を理解せず、安価に製品を作るために、これらの機能を大幅に削除した。その結果、顧客はその欠点に気付き急速に売れなくなったことがあった。

同窓会だより

昭和29年卒(二九稀会) 卒業60年記念クラス会

昭和29年(1954年)卒業仲間、憎まれっ子(二九稀っこ)世に憚る、ということから「二九稀会」という名で会合を持つてきました。

我々は卒業してはや60年。これが最後のクラス会? お互い元気のうちに! と5月20日昼 京都円山公園の料亭「左阿彌」に集まりました。 関西勢はもちろん、関東からも九州・四国からも写真1の如く23人プラス夫人2人計25人が集まり、賑やかな会となりました。



出席者：写真配置順
間瀬、平井、片井、北野、高田、田中、島原、山崎、星野、松村、山下、島田、市川、井上(和)、中村
塩見、大久保、野田、渡辺、井上(博)、小林、一圓、井上(和)夫人、井上(博)夫人、栗畑

12時半全員の記念撮影後、平井君の司会で始まり、片井君の開会宣言と乾杯で幕開け、談笑。夜より昼の方が良い、座るより椅子席の方が良い、という意見もあり、幹事の方および左阿彌の配慮でこの様な会になりました。

あいいいの雰囲気となりました。終わり頃には北野君のマジック(写真2)が飛び出し、最後は女将の篠笛伴奏で琵琶湖周航の歌を合唱、松村君の閉会の挨拶で3時半盛會時に幕を閉じました。



(写真2)

我々の仲間はどう云う訳か前後の学年に比べ天国に召された方が多く、40%があゝの世に旅立っておられる状態です。しかし今回元気だけれど当日他用で出席できない人も数人ありましたが、結局上記の25人が集まり、

また来年も集まりたいという話も出たくらい賑やかに解散しました。(文責：間瀬光朗)

昭和三二年卒クラス会

一、洛友会と私たち

我々三二年卒は洛友会と同級生であるという唯一無二のクラスであります。

なぜならば洛友会は昭和二十七年十一月に生まれ、翌昭和二十八年四月に関西支部、東京支部などが結成されて活動を開始しました。私たちの入学と期を一にします。洛友会は常に私たちのクラスメートであります。

二、卒業五七周年クラス会

二年前に五十五周年記念会を開催しました。その時、さらに盛大に六十周年を迎えようと誓い、五年後に向けて三段跳びのホップをしたわけです。今回が二段目のステップです。三年後には思い切りジャンプをします。

三、第一日

平成二六年四月二十二日の午後、花園の妙心寺を訪れました。妙心寺は塔頭が四六もある大寺院です。その一つ退蔵院の庭園(余香苑)を拝観しました。枝垂れ桜の花も残っており、藤、山吹、さつきの彩る華やかな庭園でした。妙心寺の法堂では、狩野探幽描

く大天井画、八方睨みの雲竜を拝観し、日本最古の名鐘の音に耳を傾け、しばし禅寺の雰囲気になりました。懇親宴会には、門前の料亭濱登久に三三名(内、夫人九名)が集まりました。酒を酌み交わして歓談を尽くしました。ご夫人方にとっても互いに旧知の間柄で、お待ちかねのクラス会です。六十周年は祇園でやろう、舞妓さんにも来てもらおうと賑やかなことでした。我々のクラス会では宴の終わりは恒例の「洛友会の歌」を歌い、松田長三郎先生を偲びます。先生の歌詞はクラス会の心そのものと思います。洛友会の皆様、愛唱しましょう。学歌も歌おうとの提案があり、「九重に花ぞ匂える」と高唱して格調の高い終宴でありました。

四、第二日

先ず南禅寺を訪れました。塔頭の金地院で、重文の方丈を拝観しました。狩野探幽などの襖絵があり、特に長谷川等伯の猿猴の画は水に映る月を掬おうとする手長猿を描き、毛の一本まで克明に描き上げた手法に驚きました。枯山水の鶴亀の庭も見事です。南禅寺と言えば大三門です。健脚組が急階段を昇り、眼下の絶景

を楽しみました。昼食は門前の八千代で湯豆腐を賞味しました。午後は疏水記念館で、日本最古の水力発電装置の予備知識を得たうえで関西電力蹴上発電所を見学しました。現存の赤煉瓦建物は明治四五年の第二期発電所の建物で、百年を経ます。写真でその風格をご紹介します。発電百年の歴史を綴ったビデオを見せて頂きました。また現役の発電機の轟音に、エネルギーを体感しました。洛友会の歌の歌詞「また会う日まで強く生きなん」を胸に再会を約しました。三年後、元気に会いましょう。(西台 惇記)



薫風の琵琶湖に集う

1966(S41)年卒業
34名参加

ゴールデンウィーク明けの5月11日(日)、3年ぶりに同級生が

大津プリンスホテルに集まりました。東は仙台から(内山君)、西は広島から(大上君)と遠来の参加者もおられました。

この3年間に逝った久米君に黙祷を捧げて会が始まりました。

荒木君に紹介頂いた京都大学大学院工学研究科の高岡義寛教授(電気系1974/S49年卒)に「最近の電気系教室の状況について」と題する御講演を頂きました。研究室の系譜、変遷および桂キャンパスの展開など、興味深いお話でした。高岡教授は得度されておられ、「義寛」は僧名の由。オドロキはもう一つ。何回か前に梅尾で同窓会を行いました。その際に高山寺の御案内をして頂いたのが高岡先生であったことが、この日のお話の後に知らされました。御縁の不思議に脱帽。



開宴に合わせて卒業アルバムがスクリーンに投射されました。若き日の我彼、そしてとうに年齢を追い越した恩師の姿を懐かしみました。思い思いに近況報告をする。とあつと言う間にお開きの時間。最後は加藤登紀子のヴォーカルにあわせて「琵琶湖周航の歌」と「逍遙の歌(紅萌ゆるトトト)」の大合唱。話が尽きない面々は38階のバーラウンジでの二次会へ移りました。

明けて12日(月)はゴルフ(10名)と観光(15名)。ゴルフは、瀬田ゴルフコース(東)で、懸念された雨にも遭わずホールアウト。優勝は金山君。

観光は予告していた瀬田川クルーズが月曜休航のため、大型外輪船「ミシガン」で琵琶湖(南湖の一部)クルーズを楽しんだ後、菓匠叶匠寿庵の総合施設「寿長生の郷」へ。お茶席、昼食、そして庭園散策とのんびり3時間ほどを過ごしました。

今回は卒業50年の記念同窓会。再会を約して帰路に就きました。

河野登夫 記

昭和44年入学生同窓会

昭和44年入学の電気系同窓会を平成26年3月21日、香川県琴平町のホテル「紅梅亭」にて開催しま

した。多くの同窓会は同じ卒業年度の卒業生で構成していますが、私どもは入学年度で同窓会を行っています。事情により卒業年度が違ふと知り合いがほとんどいない、教養課程時代に同じ語学を選択した者同士のつながりが強いなどの意見が出され、昭和44年入学というまとまりで開催しています。

昭和44年入学というと大学紛争で東京大学の入学試験が中止となり、受験生の我々は混乱と不安の中で入学試験を受けたことが鮮明に思い出されます。入学試験は本学でできず、宇治校舎での実施となりましたが、当日は大雪に見舞われ、交通機関は渋滞と大幅遅延となり、遅刻をする者が多く出て、時間を遅らせての実施となりました。この年に入学した我々は強烈な思い出があり、昭和44年入学生同窓会となっているのかもしれませんが。東大の入試がなかったせいか、入学生は、北は北海道から南は鹿児島県まで日本全国から来ていましたし、関東方面からの入学生も多くいます。

我々の同窓会は平成15年に卒業30年を記念して京都で、その後有馬、指宿、下呂で開催し、今回は琴平での開催となりましたが、会報への投稿は今回が初めてです。入学生は135名ですが今回は16名の参加となりました。白髪にな

っている者、髪が少し薄くなっている者、太っていたがスリムになっている者、また逆の者など様々ですが、学生時代の面影は皆残っていました。当日は早く宿に到着し、ホテル自慢の温泉に入る者や、前日から来てゴルフをした者など様々でしたが、18時30分から懇親会が始まりました。副幹事の中野が進行をすすめ、地元四国の幹事山地幸司君の「昭和44年当時、電気系は工学部で最難関であり、卒業後は日本を代表するメーカーなどに就職し、各企業で技術・研究の中心となって活躍し、一大電気産業を築いた。しかしバブル崩壊後、学生の理科離れが進み、電気系も不人気な学科となった。2000年以降は韓国、台湾などの台頭により日本の電気産業は次々国際競争から敗退していった。しかしながら我々が日本の電気産業を繁栄させ、日本を世界第2の経済大国とし、豊かで住みよい日本社会の実現に大いに貢献したのは紛れもない事実である。」と挨拶があったのち、乾杯の音頭で始まりました。

宴が盛り上がりつつあるころから参加者一人ひとりにスピーチをしてもらいました。就職してから現在までの状況、勤務する大学の状況、自分の健康、大学時代のクラブ、子供の就職、韓国企業に勤め



ていたこと、就職したのち医者になったこと、弁護士となり企業の様々な問題を担当していること、外資系企業に就職したのち様々にトラバユしたことなどなど、各自尽きない話に盛り上がりました。今回は京都在住の高橋達郎君にお願いし、京都で開催することとなりました。中締めは弁護士として著名な片山英二君の音頭で乾杯し、琵琶湖周航の歌を皆で合唱して1次会はお開きとなりました。2次会にはホテル内のクラブに移り、更に懇親を深めるとともに自慢のものを披露し、今回は京都で再開することを約束して23時頃解散となりました。次の日はゴルフ組、金刀比羅宮参拝などの観光組などに分かれて楽しくすごすことができました。

(記 中野直文)

支部だより

北海道支部総会報告

去る5月31日(土)17時30分より札幌市内のグランドホテルにて平成26年度北海道支部総会を開催しました。

今年度は、本部から両宮先生をお迎えし、9名での開催となりました。

最初に、中山支部長より、支部総会が北海道支部としては唯一の行事であり、少人数ではあるが今後も継続してのご出席をお願いしたいとのご挨拶をいただきました。

続いて、木元幹事より前年度会計報告および今年度予算案について、中山支部長より役員改選についてご説明・ご提案いただき、出席者全員の了承を得て、承認されました。新役員は、澤井秀支部長、木元伸一幹事、佐野大輝会計幹事となります。

最後に、本部よりお越しいただいた両宮先生から、大学や洛友会の近況について、ご説明いただきました。エレクトロニクス・サマーキャンプでの取組内容や電気系懇話会の状況など詳細にご説明いただき、また、卒業式やキャンパスの状況など在学习時との違いについても話題が広がり、北海道支部として例年以上に有意義な総会と



なりました。

この後、懇親会に移り、恒例に従い会員の近況報告等を中心に話題を進めました。

この中では、在学中の講座や学生生活の状況、あるいは現在のお仕事や生活に関する話題や趣味などについて歓談し、懇親を深めました。

いつものことではありませんが、予定していた時間はすぐに経過し、次回の再会を願いながら、記念写真撮影後お開きとしました。

北海道支部の支部総会は少人数での開催が続いているため、今後はこれまで参加されていない方のご出席をお待ちしています。

佐野 大輝(平16年卒)記

洛友会東北支部総会報告

平成26年5月31日(土)、仙台市内の「ホテルモントレ仙台」で平成26年度東北支部総会が開催されました。本部より下田宏教授の御出席をいただき、東北支部からは5名が出席しました。

総会は井上支部長のご挨拶で始まり、議事では25年度決算報告、26年度予算案について幹事より説明があり、参加者全員の一致で承認されました。続いて下田先生より先輩と学生の交流会の様子など本部の25年度主要な事業報告とともに26年度事業計画(予定)、25年度より導入された会員専用Webサービスや新名簿システムの概要、また、京大電気系教室の近況などについてお話しいただきました。

総会後には懇親会を行いました。東北支部の活動は毎年の総会



のみですが、ほぼ出席メンバーが固定されている中で、一年振りの各自の近況、学生時代の研究室やお世話になった先生の思い出の話、また、原子力とエネルギーのあるべき姿など、自由な雰囲気での議論に花が咲き、あっという間に予定の時間となりました。来年度の総会での再会を約して散会となりました。

秋山 康人(昭57年卒)記

洛友会東京支部 春の見学会報告

春たけなわの4月16日(水)、恒例の春の見学会を実施いたしました。平日にも関わらず、満員御礼の40名(延べ41名)のご参加を頂きました。幸いにも好天に恵まれ、絶好の見学日和となりました。

本年の見学会は、神奈川県横浜市の防衛大学校を訪れました。各位のご協力のお陰で、JR横浜駅を定刻前に出発でき、11:30過ぎに防衛大学校に到着しました。

正門にて、今回の防衛大学校見学会を先導いただき電気情報学群の守本教授のお出迎えを受け、制服姿の訓練部長のご挨拶を頂いた後、電気情報学群大会議室に移動しました。電気情報学群長の柳教授の歓迎のご挨拶の後、森武教授・守本教授より、電気電子工学科・

理工学研究科の概況説明を頂きました。その後、本部庁舎での記念撮影をはじめ、係の方のご案内のもと、卒業式の帽子投げで有名な記念講堂、モニュメント「国の護り」、防衛大学の歴史が一目でわかる資料館、防大グッズが購入できる学生会館などを順次見学致しました。最後に、学生による「課業行進」も観覧いたしました。

防衛大見学の後は、セントラルホテル内の日本料理「あら井」に移動し、昼食をとりました。洛友会東京支部会員で防衛大名誉教授の戸田耕司様(S44卒)、防衛大卒の松崎充宏様(S38修士卒)よ





り、防衛大ゆかりのスピーチを頂き、和やかな会席を楽しみました。昼食後、NHKドラマ「坂の上の雲」のロケ地にもなった記念艦「三笠」に立ち寄りしました。三笠の歴史を綴るビデオ鑑賞・現地係員の解説の後、東郷司令長官等が指揮を取った前部ブリッジなど、三笠艦内の見どころを見学しました。その後、バスにて横浜駅まで戻りました。皆様のご協力のお陰で、終始スムーズに進み、定刻通りの17:45に解散することができました。今回の見学にあたり、綿密にご準備、ご対応頂きました防衛大名誉教授の戸田耕司様(S44卒)、防

衛大の守本教授、森武教授、また防衛大を見学先としてご紹介を頂きました来山征士様(S42卒)に感謝申し上げます。

【報告】洛友会東京支部
会計幹事
H7電子卒 古屋 裕規



第101回 関西支部ゴルフ競技会報告

〈ブレイク状況〉

第101回関西支部ゴルフ競技会が平成26年5月17日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は天候に恵まれ、アウトは福川氏(昭和30年卒)、インは細田氏(昭和36年卒)の始球式でブレイクを開始し、合計18名(うちシニア9名)が競技に汗を流されました。結果は以下のとおりです。

- (シニアの部)
優勝 細田純一郎 (S36年卒)
2位 福川 幸男 (S30年卒)
3位 平嶋 正芳 (S38年卒)
- (一般の部)
優勝 小林 千彰 (S49年卒)
2位 大久保昌利 (S60年卒)
3位 福田 隆 (S57年卒)

〈懇親会〉
ブレイク終了後、大久保氏(S60年卒)の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

表彰式では、入賞者に景品および優勝カップが手渡されたあと、入賞報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる



第99回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

の発展を期待するコメントを頂きました。

〈お知らせ〉

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)ゴルフ競技会を開催しております。今回は平成26年10月11日(土)を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

大久保昌利 (S60年卒)
田中 正臣 (H19年卒)
連絡先 050-7104-6037 (田中)

tanakamasami@b3.kepcoco.jp

編集後記

平成26年4月に、ある会員から会費の一括納入のお申し出があり、30万円を受領しました。75年分に相当します。ご寄付ではなく、会費とされることをご要望でした。近年の洛友会の収支は赤字で、現在財務の健全化に取り組んでいます。会報などの印刷や郵送部数の削減、事務作業の効率化、学生と先輩の交流会事業収入増などを図っています。そのような状況の中での一括納入に会長・役員・事務局は大変感謝しています。会員のご卒業年次から、すでにリタイ

アされたであろう会員と推測されます。収入に制限のある中で、洛友会のことを心に留めていただいていることにお礼を申し上げるとともに、会員の生活がこれからも健やかであることをお祈り申し上げます。

訃報

昭15	相木 一男	26.3.18
昭15	黒田 利夫	22.11.5
昭16	坪井 達夫	26.5.17
昭16	森本 芳夫	26.4.28
昭17	清原 道也	26.2.11
昭20	竹内 平一	26.3.23
昭21	深谷 通俊	25.3.10
昭24	野村 精二	25.5.16
昭27	伊東 功裕	25.12.29
昭28	武田 正治	25.9.9
昭30	加納 寿夫	26.1.9
昭32	藤田 惟之	26.3.21
昭33	北川 孟	26.2.23
昭34	三宅 和雄	25.10.3
昭34	進士 昌明	25.11.13
昭39	大井 重光	25.9.17
昭42	深尾昌一郎	26.5.3
昭43	木谷 進	25.9.18
昭43	田原伊和男	25.7.7
昭49	野田 宗孝	昭61.11.11
平25	東 孝洋	26.1.18

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。